COVID-19感染症拡大の状況下での精神看護学実習における看護学生の学びの実態調査

山﨑陸世[1）2）]、上野栄一[2）]、西出順子[2）]、高田勝子[2）]

1）人間総合科学大学大学院 心身健康科学専攻 博士課程1年生

2）奈良学園大学　保健医療学部看護学科

目次

- 研究の背景
- 研究目的
- 研究方法
- 倫理的配慮
- 研究結果
- 考察
- 結論
- 謝辞

研究の背景

「看護基礎教育における臨地実習の意義について」

臨地実習は患者とのかかわりを通して、援助的人間関係形成能力を育む場として、重要な学習過程

「看護実践に不可欠な援助的人間関係形成能力専門職者としての役割や責務を果たす能力は、看護サービスを受ける対象者と相対し、緊張しながら学生自らの行為を行うという過程では育まれていくものである」

文部科学省「看護教育の在り方に関する検討会報告」(平成14年3月26日議事録) [1)]

研究の背景

COVID-19感染症の拡大により、
看護学生の臨地実習にも影響が及んでいる。

「実習受け入れ見通しとその対応（2020年度、246大学）」

- 変更ありが83.4%であった。
- その内訳は、実習施設の変更36.4%、実習時期の変更39.0%、臨地日数・時間の短縮79.8%、学内実習への変更78.7%、遠隔実習への変更42.3%であった。日本看護系大学協議会の調査（2020．12）[2)]

研究の背景

- 精神看護学実習は3年次後期に2単位90時間(実習期間2週間)のカリキュラムを組んでいる。

「本学の精神看護学実習の目標」

「精神の健康上の問題を有する人に対し、共感的な理解のもと、治療的関係を築くことができる」

- 臨地実習は、学内の講義や演習などで学んだ知識を初めて出会う精神障害者に緊張しながらも実践していく機会となる。
- 学生は臨地に行くまで精神障害者と接したことがない場合が多い。

研究の背景

- 2020年度は、実習施設の変更や臨地での日数の短縮、学内実習と組み合わせるなど、さまざまな実習形態に切り替えた。(表１)

表１．2020年度精神看護学実習の実習形態（全18グループ：1グループ4名～5名）

実習形態および臨地の日数	グループ数
臨地実習(病院)2週間	5
臨地実習(病院)1週間+学内演習1週間	6
臨地実習(病院)1日のみ+残りすべて学内演習	2
臨地0日+完全学内演習	1
臨地（訪問看護ステーション）2日+学内演習	4

研究目的

Withコロナ時代における臨地実習の教育につなげていくため、改めて振り返ることが重要である

- COVID-19感染症の拡大の影響により、さまざまな実習形態となった精神看護学実習において学生はどのような体験をし、どのような学びがあったのか、学びの実態調査を行い、今後の教育の示唆を得ることである。

研究方法

- 研究デザイン
  対象者のインタビューの質的データを内容分析とテキストマイニングを併用した混合分析法である。
- 研究対象
  A看護大学　4年生　14名
- 研究期間
  2021年9月～2022年3月
- データ収集方法
  「精神看護学実習にどのような体験をして何を学んだのか」インタビューガイドに沿って半構造的面接法を用いて実施した。内容は本人の了解を得てICレコーダーに録音し、逐語録を作成した。
- 分析方法
  内容分析とテキストマイニングソフト（Text Mining Studio　7.0）の分析結果について統合して分析を行う。

※研究結果はテキストマイニングによる分析結果を中心に示す

倫理的配慮

- 研究対象の人権擁護

学生への依頼は研究者が口頭及び書面をもって下記のことを説明して同意を得た。

「研究目的」
「研究方法」
「インタビューは録音すること」
「個人情報の守秘」
「データの取り扱い」
「中断・中止してもよいこと」
「成績に関係はないこと」
「不利益を被ることはないこと」

研究結果①：基本情報

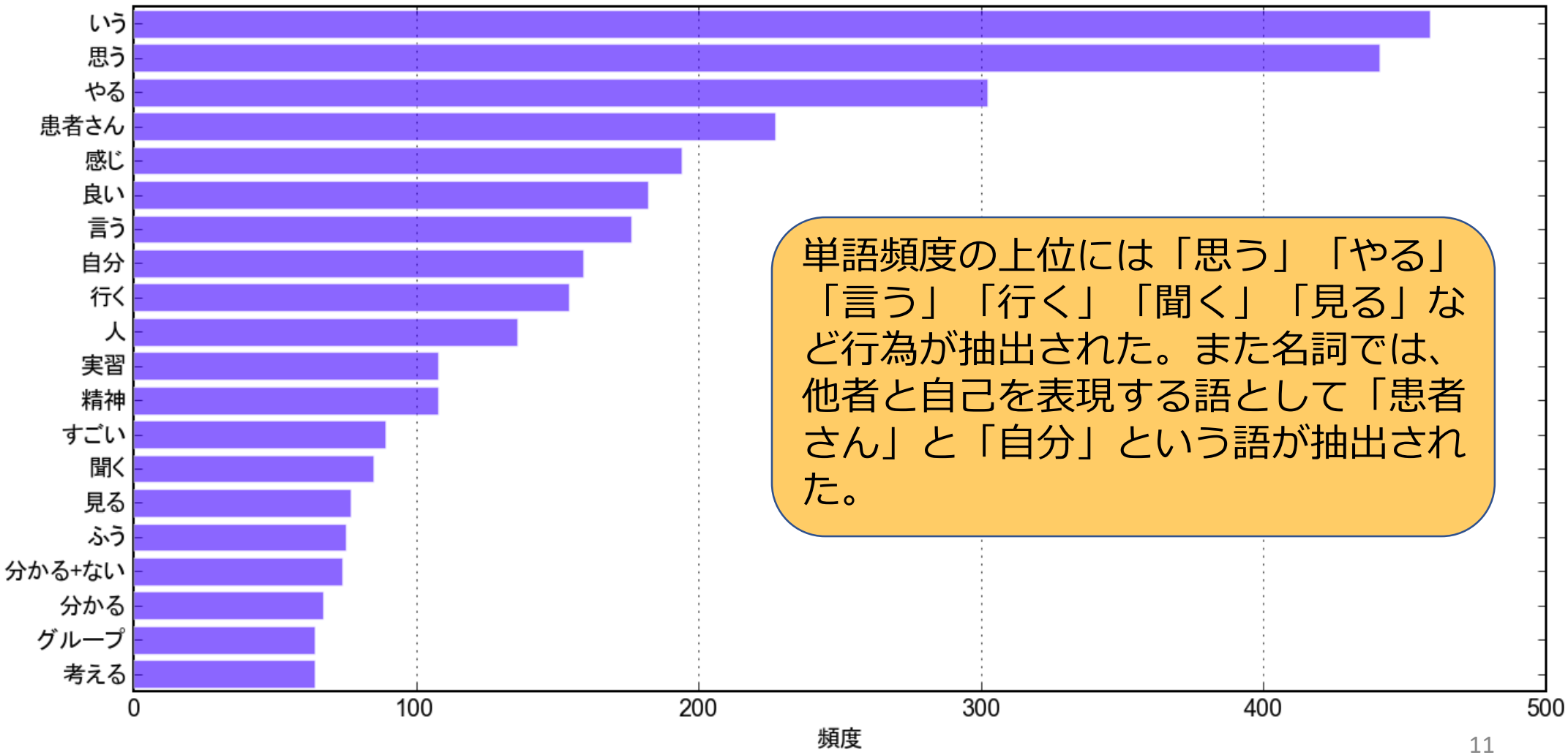
▶ 表１．テキスト情報

項目	値
総行数	3458
平均行長	31.5
総文章数	4935
平均文章長	22.1
述べ単語数	23597
単語数	2799

▶ 表２．品詞別出現回数

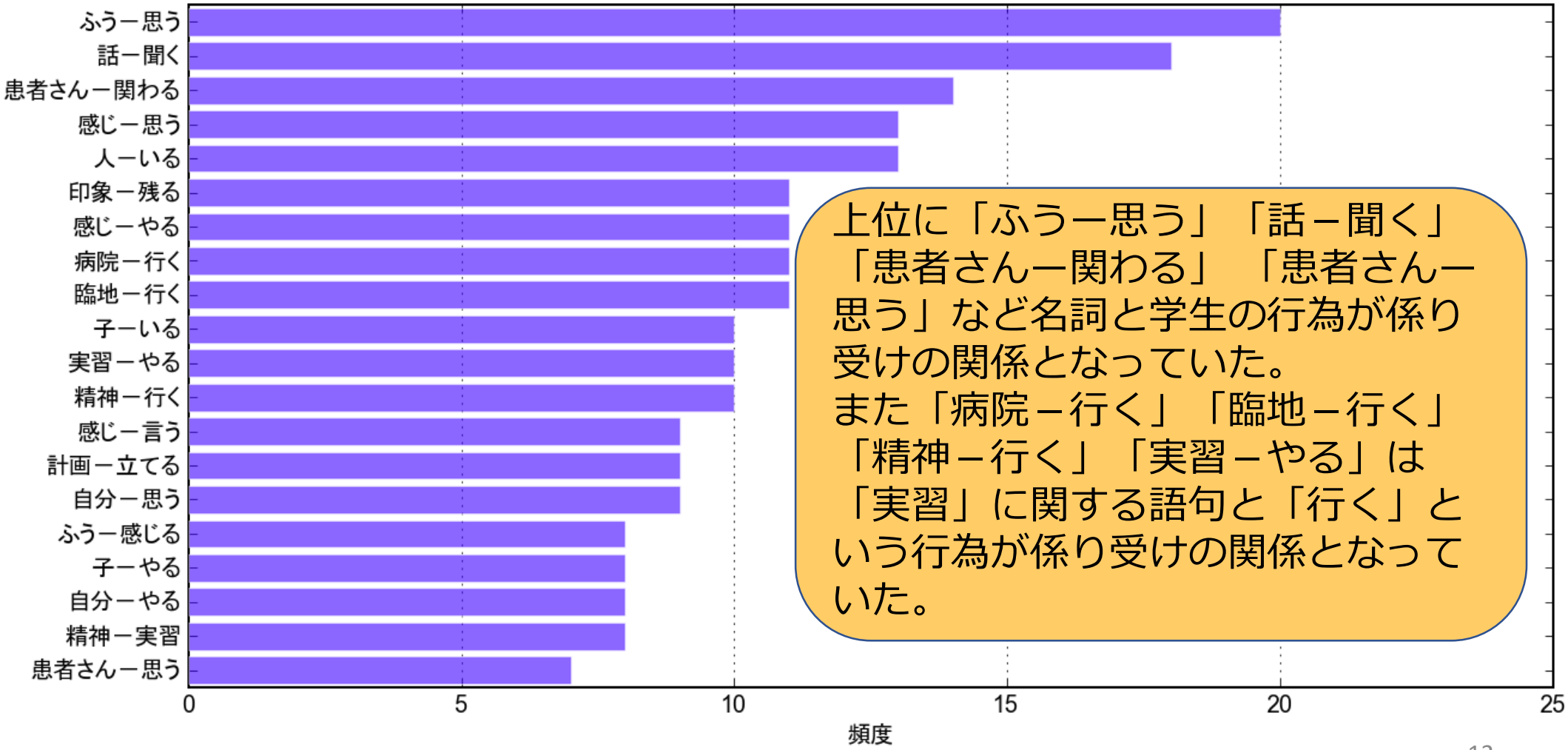
品詞	出現回数
名詞	7490
動詞	5086
形容詞	789
形容動詞	481
副詞	3212
連体詞	1284
助動詞	41
接続詞	391
感動詞	2531

研究結果②：単語頻度分析



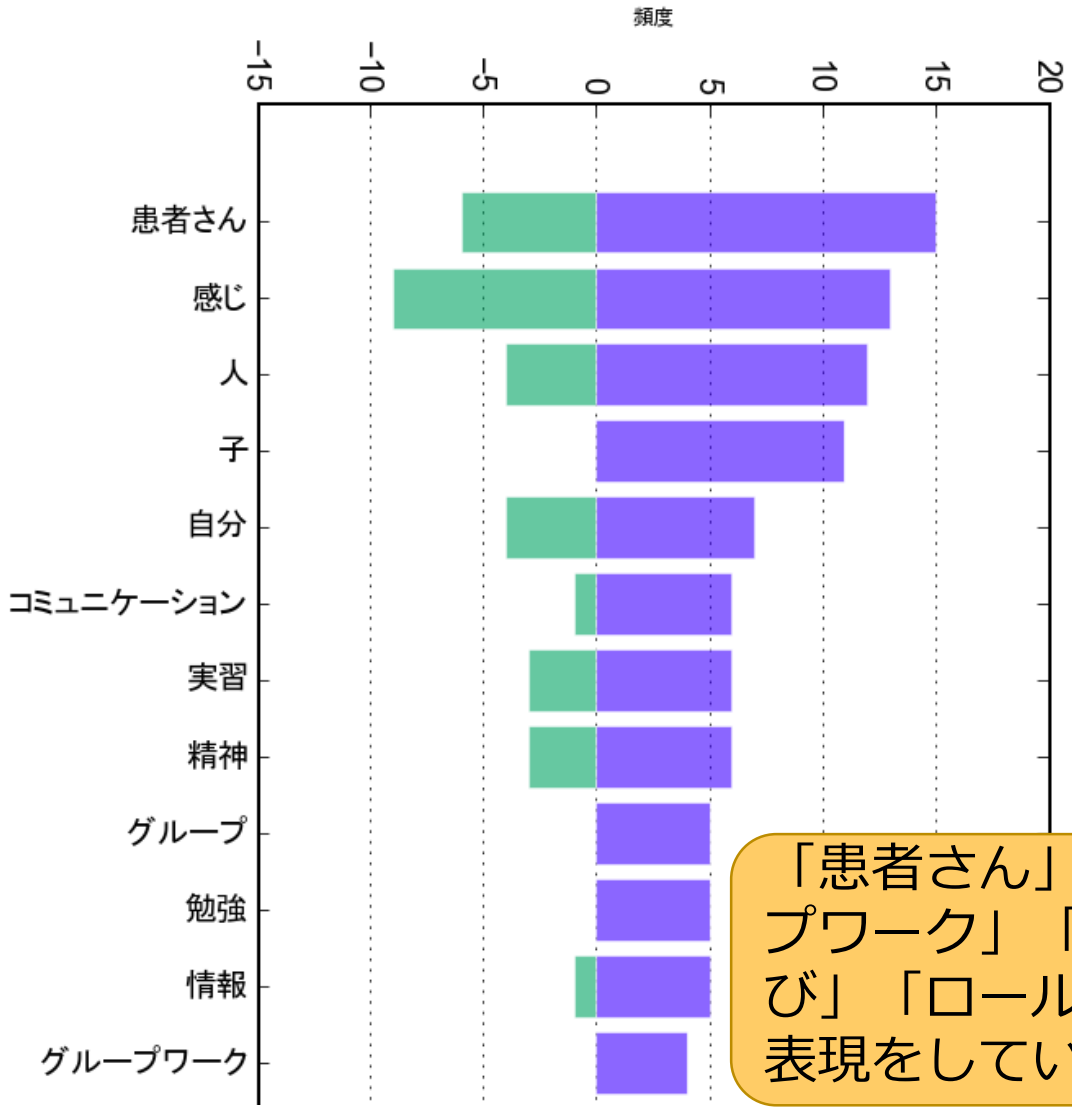
単語頻度の上位には「思う」「やる」「言う」「行く」「聞く」「見る」など行為が抽出された。また名詞では、他者と自己を表現する語として「患者さん」と「自分」という語が抽出された。

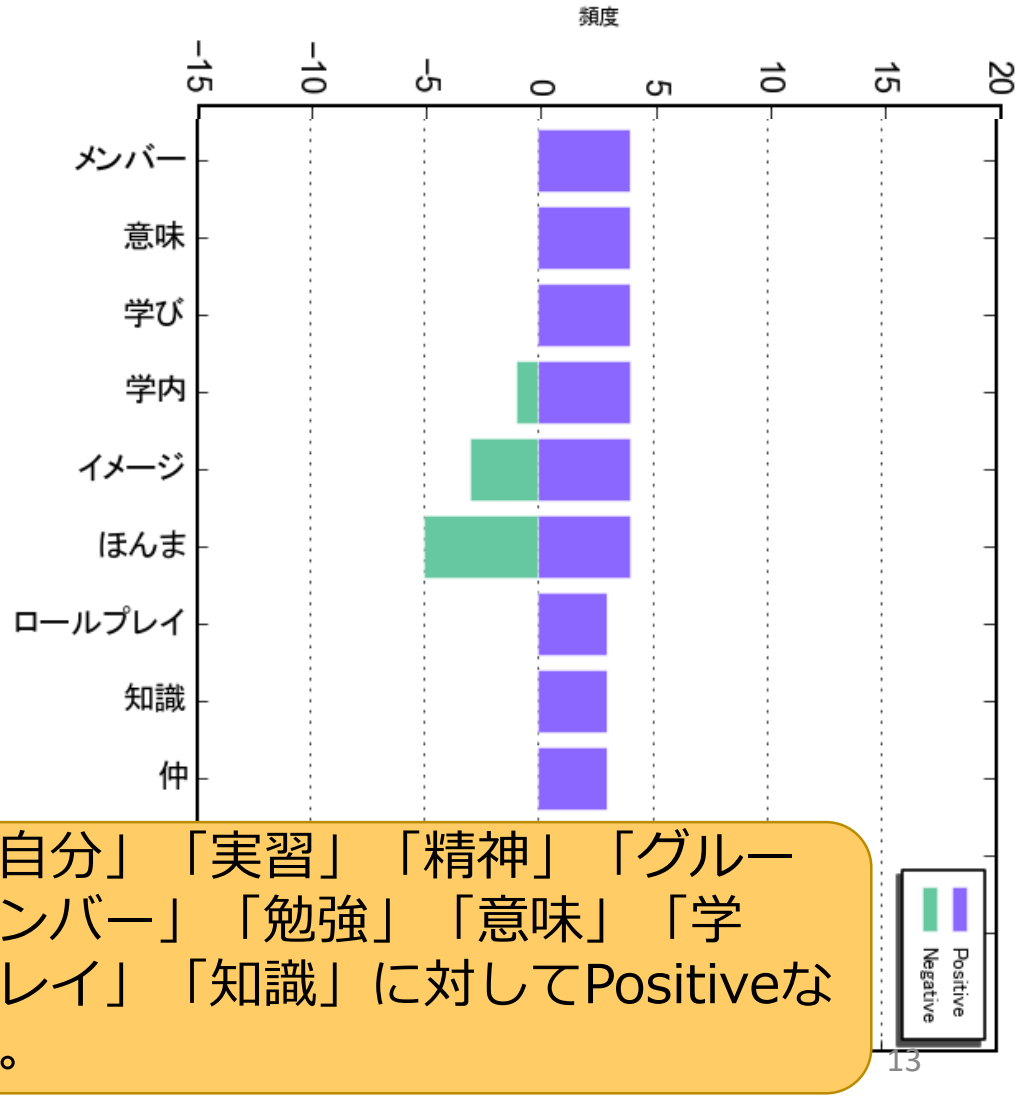
研究結果③：係り受け分析



上位に「ふうー思う」「話－聞く」「患者さんー関わる」　「患者さんー思う」など名詞と学生の行為が係り受けの関係となっていた。
また「病院－行く」「臨地－行く」「精神－行く」「実習－やる」は「実習」に関する語句と「行く」という行為が係り受けの関係となっていた。

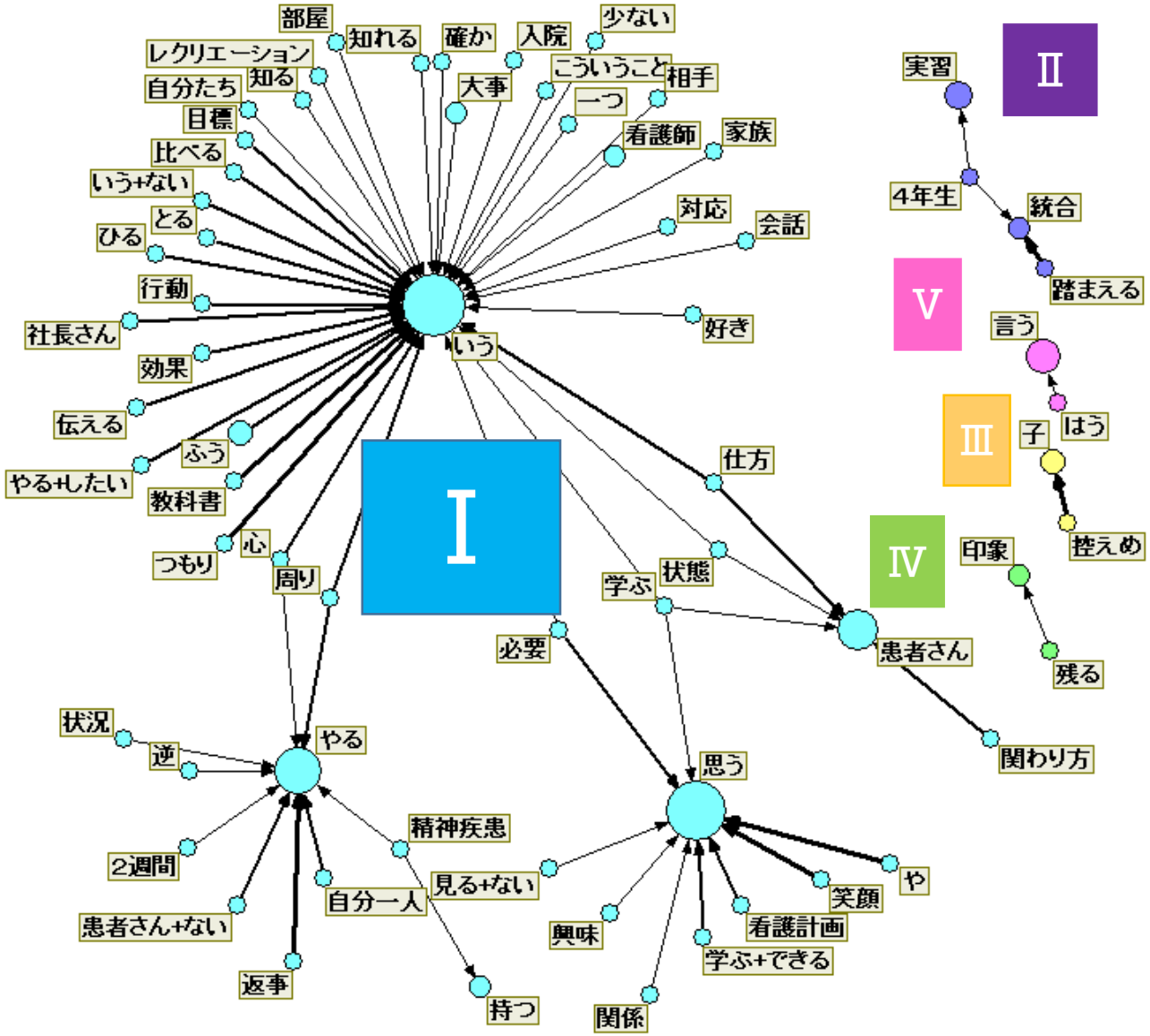
研究結果④：評判抽出





「患者さん」「自分」「実習」「精神」「グループワーク」「メンバー」「勉強」「意味」「学び」「ロールプレイ」「知識」に対してPositiveな表現をしている。

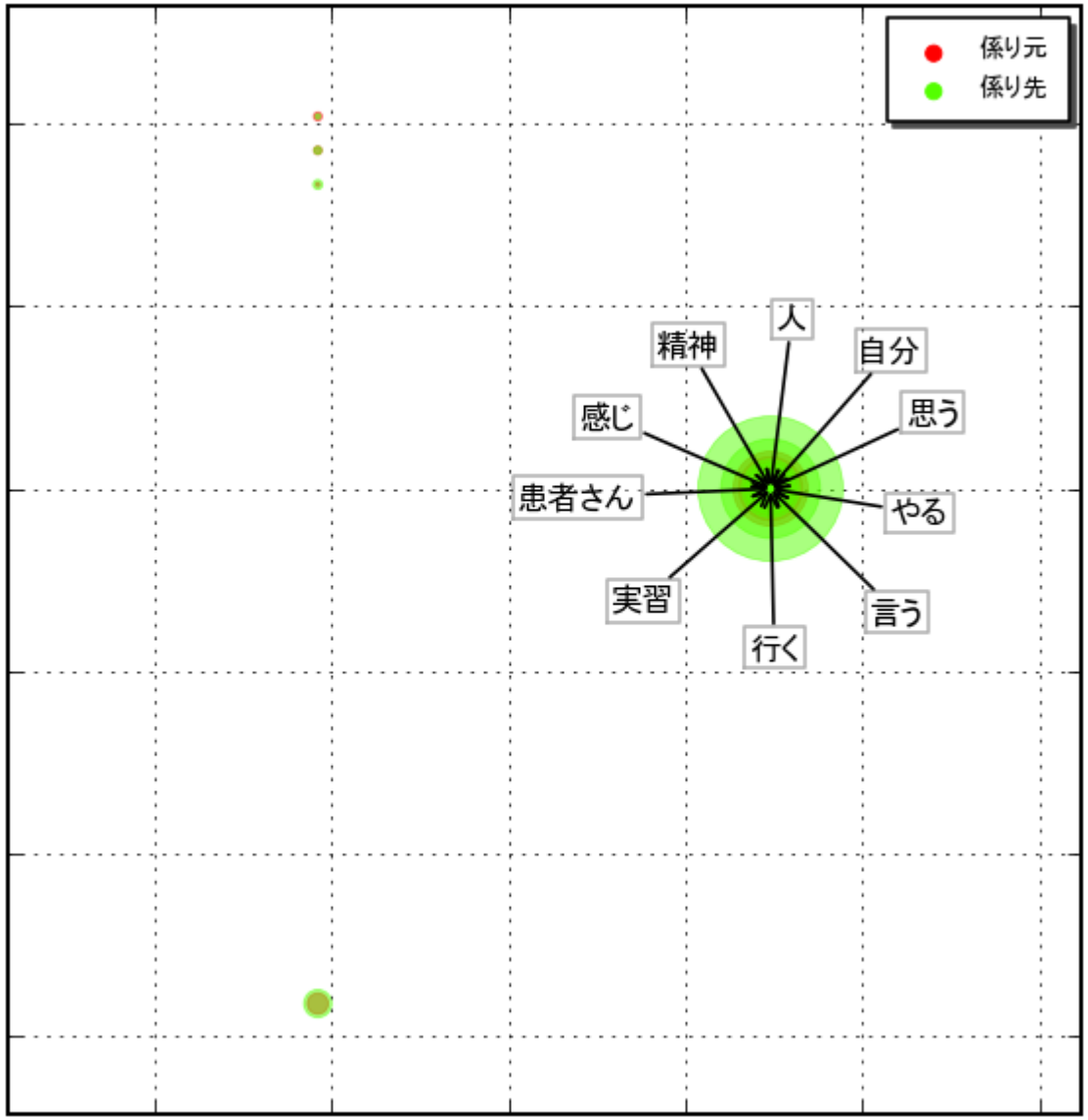
研究結果⑤：ことばのネットワーク



ことばのネットワーク（出現回数５に設定）では、Ⅰ～Ⅴの5つに分類された。
Ⅰ.「いう」「思う」「患者さん」がつながり、一方では「いう」と「やる」がつながっていた。
Ⅱ.「4年生」「統合」「実習」について表現していた。
しかしⅢ～Ⅴはクラスターを形成していなかった。

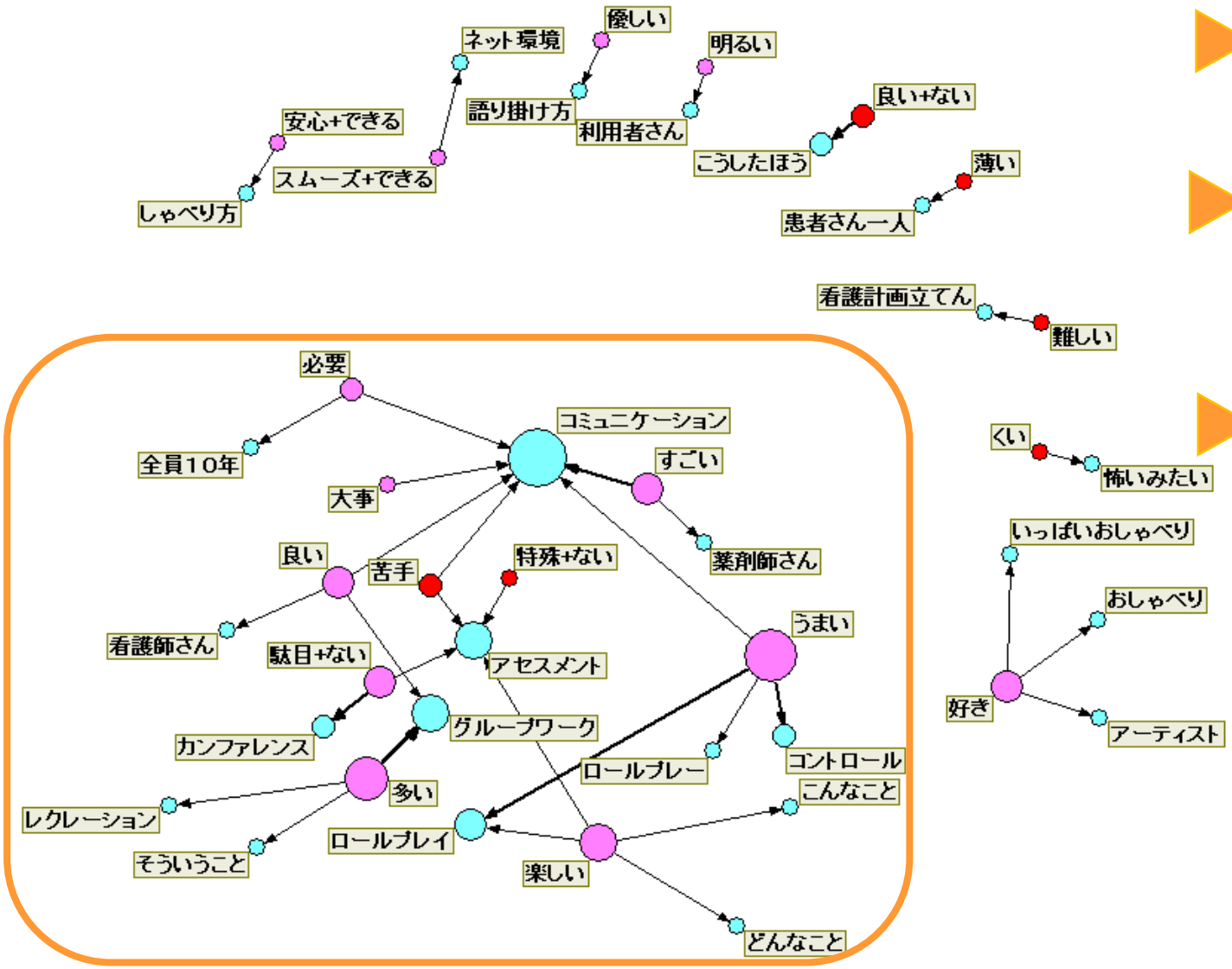
そのうちⅢの「子」「控えめ」のつながりはグループワークでの控えめな学生を表現している語が抽出された。

研究結果⑥：対応バブル分析



- これらの語句は、単語頻出分析においても上位を占めた語句であった。
- さらに「思う」「やる」「言う」「行く」という行為を表す語と「患者さん」「自分」「人」など自己と他者を表す語が同じバブルに出現していることから、ことば同士が同時に語られていることを表している。
- 実習を通しての対人関係に関することが特徴として捉えられていた。

研究結果⑦：評判抽出ネットワーク図



- コミュニケーションについて学生は「必要」「大事」と感じている。
- また「うまい」「すごい」「良い」と看護師・薬剤師の専門職とつながっていた。
- アセスメントについて「苦手」と「楽しい」の反対の語につながっていた。

考察

- 「思う」「やる」「言う」「行く」という行為を表す語が、単語頻出後の上位を占めていることから、精神看護学実習を能動的に関わることができていたと考えられる。

- 「患者さん」と「自分」という語が頻出しており、「患者さん—関わる」「患者さん－思う」が係り受けしていることから、自己との関係性について振り返ることができていると考えられる。

- コミュニケーションについて、学生は「必要」「大事」と理解できたと考えられる。また、また「うまい」「すごい」「良い」と看護師・薬剤師の専門職とつながっていた。これは、臨地実習で患者－看護師間のコミュニケーション場面を見学して、学内演習では得られない学びがあったことが推察できる。

- コロナ禍での実習においてさまざまな実習形態をとったが、 「勉強」「意味」「学び」の語がPossitiveな表現をしていることから、学生にとって精神看護学実習の学びについて肯定的に捉えていると考えられる。しかし「アセスメント」について「楽しい」と「苦手」という語から、難しいと感じている学生がいることがわかった。よって、一人ひとりの個別性に合わせた教育の必要性の示唆を得た。

結論

- 単語頻度分析では「思う」「やる」「言う」「行く」「聞く」「見る」など行為が抽出された。また名詞では、他者と自己を表現する語として「患者さん」と「自分」という語が抽出された。また、さらにその行為の語句と「患者さん」や「自分」という語句が同時に語られていた。
- 学生は、コミュニケーションについて「必要」「大事」と感じている。
- 新型コロナウイルス感染症の影響にて、さまざまな実習形態をとったが、学生の「学び」についてPossitiveな表現をしていた。
- 「アセスメント」について一人ひとりの個別性に合わせた教育の必要性の示唆を得た。

引用文献

１）文部科学省（2002）.大学における看護実践能力の育成の充実に向けて
平成14年3月26日議事録,看護教育の在り方に関する検討会報告,2021年5月21日閲覧,
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401.htm

２）一般社団法人日本看護系大学協議会　看護学教育室向上委員会「2020年度にCOVID-19 に伴う看護学実習への影響調査結果」(2020.12.　), 2021年5月21日閲覧,
https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2020/12/covid19_surveyAreport.pdf